

世界史を考え直す（86・11・15）

会 田 雄 次（昭12・文乙）

（編注：会田氏は一九九七年九月に亡くなりましたが、このたび発見された本稿を、ご遺族の了解を得て掲載いたします。本来は『神陵文庫』第五巻に掲載されるべきであった昭和61年のレクチュア記録です。）

ご紹介いただきました会田です。最初にお断りしておきますが、私は歴史をやっているんですが、歴史学は大変つまらない学問だということを非常に感じます。資料に書いてあること以外は絶対に言ってはいけないということに縛られまして、こんなに面白くないものはなかったのであります。しかし、勤めを辞めましてからだいぶになりましたので、そろそろ資料にはないけれども、確実だということを考えてみたい。反論はありましたが、非常に大ざっぱに、ヨーロッパと日本との違いの根幹の一つ二つをお話しし、皆さんのご

参考にしていただきたいと思います。

私は、兵隊に行きましてビルマで戦いました。私はいちばん下っ端の兵隊でしたので、上官の命令通りに動いたわけですが日本軍は全滅しました。要するに、あの戦争はつまらないもので、敵に全然損害を与えることなしに、こちらが死んだだけです。私は収容所に入られました。これがアーロン収容所で、終戦後二年間、イギリスとぶつかりました。イギリスは、ここでも本国と同じ、各階層別に区別されているのです。上から下まできれいに社会層と連関しております。上は将校から下士官、そして一般の兵隊というふうにきれいに分かれております。それが集団でぶつかりますと、非常によくイギリス人の性格がわかります。いろいろなじめられました。どうも俺たちがいままで習ってきたイギリスとは、全然違うではないかということ、帰って来ていろいろ考えたのですが、どうも私の知る限りの歴史からでは、その本質がわからないのです。それで、やはり歴史の奥底のものをもうちょっと考えてみたい。歴史学というのは、大体細かいところ、細かいところを推理していく。「木を見て森を見ない」ということがあります。推理小説風に、細かいところを推理していつて結論を出すという楽しみがあるのですが、根本を掘っていくということは、あまりやらない。その根本をちょっと掘ってみたい、という感じがしましたので、それを申し上げてみたいと思います。違いの根本を、です。

これは自分の責任ではありませんが、明治以来、日本はヨーロッパあるいは欧米を、戦後はアメリカを学んできました。そのときヨーロッパは、十九世紀の完成された、いわば近代社会でありまして、そこには非常にゆとりもあつた。ヒューマニズムも生まれ、また国際化も進んでいる。合理主義も貫徹している。それを見て、ヨーロッパの近代はそういうものだと思います、それを細かく分析していったわけですが、いわば正装したヨーロッパ人の姿を見て、これがヨーロッパだと思い、肉体は見えないのではないか。着物の柄は大変細かく研究してきましたが、肉体はまだ見えてないのではないか、という気がいたします。中世などをやっておりますと、まさにそう感じます。

それについては、本当にわからないことが多すぎます。資料では絶対にわからない。ですが、いま一生懸命に考えまして、合っているか合っていないかはわからないけれども、私なりにはそうだと思つている、その一つの道筋だけを今回はお話してみようと思ひます。私は、人文科学研究所に勤めておりました。あそこには、いろいろな人が研究にやつてくるのですが、フランスの農業経済史をやっている若いフランス人がやつて来ました。十五年ほど前のことです。もちろん、その人は日本のことを研究しているので、私のような西洋史研究者とは接触はしないのですが、ちよつと会つて話をしたことがあるのです。そのときに私は、一種のカルチュア・ショックを受けました。

「君はいつたい日本の農業史をやるといふけれども、どういふことをやりに来たんだ」と聞くと、彼は、「日本は昔から地震など、天災の多い社会だった。したがって災害に関して、政府の対応も個人個人の対応も大変進んでいるという話を聞いた。そこで私は、近代以前における日本の農業的な災害と、それへの対応の仕方というものを一つのテーマにしてみたいと思うのだ」と言うのです。さらに「日本の近代以前の最大の飢饉は天明の飢饉だった。あれは三年も続いたのだが、初年度がいちばん激しく、東北の岩手を皮切りに、四国に飛び、九州に飛んだ大飢饉だった、と聞いてきたが、そこでちよつとわからないことがある」と言うのです。「いつたい餓死者は何人出たのか」「それは学者によつていろいろ意見があるだろうが、大体東北地方の直接の餓死者は二十万人、全国に及んだ間接的な餓死者、被害を受けて死んだ人が五十万人前後だろう」「私もそれぐらいのことは調べてきた。ところで当時の日本の人口は三千万人足らずだが、三千万人の中で五十万人が餓死したんだね」「うん、大変なことじゃないか」「ふうん」と彼は考えている。

東北では松の皮をはいで食べていた、すさまじい飢饉だと私は思っていたが、向こうは何だか損害が少なすぎて面白くなさそうな顔をしている。こちらはショックでした。後でだんだんわかりましたが、それが一つの出会いでした。

ではなぜ彼が死者五十万人の災害であまり驚かなかったか、ヨーロッパと比べて考えて

みたいと思います。ヨーロッパは、メキシコ暖流という大暖流が沿岸を洗ってくれておりますので、冬は暖かいのです。穏やかですし、おそらく日本よりも暖かいぐらいではないでしょうか。しかし、パリが北緯五十度近くですから、旧カラフト国境近くに当たるわけで、その北にヨーロッパの中心部が展開しているということになります。従いまして日照が少ない。そして冬雨地帯でして、冬以外は雨が大変少ない。芝生におおわれてきれいに見えますけれども、土地の生産性というのは、驚くほど低いのであります。近代農業世代を考えずに、もつと古い時代を考えていただきたいのです。

日本の米は、これは不思議な穀物です。連作が効いて、二千年間耕していてもまだ耕せるといふ作物なのです。新しい日本史の研究によりますと、奈良時代に、すでに二十五倍から五十倍ぐらの収穫があつたといひます。いまではもつと大量でしょう。これは沢田君という人が研究していることですが、五百年ぐらい前の中世のヨーロッパ付近で、主食として生産していた穀物の小麦の収穫量は、どのくらいあつたと思ひですか。千五百年前後、かなり農業が進歩したときで、大抵の方は七、八倍だろうとか、五倍ぐらいだろうといひますが、とんでもないのです。二、三倍と書いてあるのが多いのですが、とてもそれだけはありません。実質収入は二倍にならない。沢田君は一・七倍という計算をしたのです。穂が実らないというのではなくて、途中で枯れてしまふのです。恐るべき貧困な土

地だということが、おわかりいただけると思います。このことがわかりませんと、ヨーロッパのいろいろなことがわかりません。

たとえばヨーロッパ人は風呂へ入らないといえます。昔は入っていました。中世は随分入っていたようです。ところが急に入らなくなった。ルネッサンスのころ、十五、十六世紀ごろから急に入らなくなったようです。風呂に入った日数などは資料には残っていませんからわからないのですが、いろいろなことから考えて入らなくなったといえます。焚きつけのために木を伐るわけですが、それができなくなった。十四、十五世紀になりますと鋤山業が発達しますし、鉄その他の精錬業が発達します。そのために木を伐りますので、森はまる裸になってしまいます（いまドイツにある森は、全部人工林です）。ですから飯炊きぐらいには使いますが、とても風呂を炊くのにはまわる木材はありません。石炭はまだ発見されていません。そこで風呂へ入らなくなったのです。そういうことを日本は知らない。日本というのは不思議な国で、木はどんどん生育しますから、あれだけ刀を作ったり、陶器を作っても禿山にならなかつた。梅雨のせいでしょうか。ちなみに朝鮮は梅雨がありませんから裸になってしまいました。要するに、ヨーロッパの土地の生産性がいかに乏しいかということが、わかつていただけたと思います。

古い話ですが、氷河期が終わりまして、ヨーロッパに人が集まってきた。とても生活が

できません。どういう状況だったかわかりませんが、ある有名な学者が（論文でそんなことを書くとは叱られますから、週刊誌のようなものを書いてるのですが）、古いヨーロッパの歴史を理解するためには、難破船だと思つてもらつたらいいと、書いています。つまり、彼の説によりますと、船が難破しました。そこで乗組員とか乗客が各々ボートに乗り移つた。そのボートには、五十人が暮らせる三月分の水と食糧が用意してある。その五十人が力を合わせて漕ぎに漕いだら、三月ぐらいの間には島とか大陸へ着いて、全員が助かる公算が大きい。これは次の収穫期がやってくるということです。しかし、そこに百人乗り移つたら必ず全員が死ぬ。生き延びるためには、この百人を半分に減らさねばならない。どうしても半分に減らさねばならない。そういう選択を毎年やってきての二千年間がヨーロッパなのだと書いています。

この半分というのが不思議なのです。何かそのように話が合うのです、殊にギリシャ時代のツキジデス、ヘロドトスの伝説にもそれを思わせるようなことが出てきます。たとえばリビアの国のある王国の話、これはギリシャの伝説ですが、そこでは十八年間飢饉が続いた。国民全員が餓死しそうになった。そこで王様は、国民に博打を奨励した。つまり、親と子の二人が賭をして、勝ったほうが相手の食糧を奪つて食べて生き延びる。負けたほうは死ぬ。そういう賭を奨励したのですが、あまり流行らない。それはそうでしょう。

そこで今度は、王子と国王が賭をして、負けたほうが国民の半数を率いて船に乗り、あてもない滅亡の旅に出るという約束をしてクジを引いた。王子が負けまして、王子は約束どおり船に乗って、あてもなくリビアから離れて地中海に乗り出した。幸いにもそれが漂着した所がローマの近郊で、これがエトロス、カンヌの起原だという。そのように、半分減らすという話は随分出てきます。

こんなことではたまりませんから、何とか生きようとするのですが、やはりどうも食糧を巡るすさまじい家族間の奪い合いというのがありまして、古い時代は、親殺し、子殺し、特に子殺しというのが一般的だったようです。つまり、子供は小さいときは生かせられませんが、大きくなって結婚したり大飯を食ひ出したりしたら、とても限りある耕地、限りある牧地では子供を養えない。殺していく。夫婦が年を取りまして、だんだんのびてきたときに、大きくなった子供を跡継ぎにするというしくみになっていたのです。ですから、ヨーロッパは末子相続制が中世まで普及しました。簡単にそうともいえないのですが、わりにそれは多いのです。子供を殺すなどというのは気の毒ですから、青年期に達して、食糧が要るようになってきたときは、せめてもの情だということで、子供を殺す代わりに親の元から放逐する。「アダムとイブの楽園」という伝説が出てきたことに通じるわけなのです。

こういう状況ですから、中世のヨーロッパは大変であります。みんな必死になって農業をやる。主要な生産は農業ですから、農業について真剣に努力したのです。その結果、これは専門家の間では常識になっていますが、十二世紀の前後に第一次農業革命というのが展開しました。生産がうんと増えたのです、それまでは畑は一年間は小麦を作り、次の年は牛や馬を遊ばせて、その肥料で地力を回復して、次の年にまたカラス麦とか大麦を作る。また次の年は放牧をして、次の年は小麦を作るといふうなやり方で、二年に一回ずつ、一年半以上、土地は遊んでいるわけです。ところが、その農業革命によって、まず冬作の小麦を作り、次に夏作の麦を作り、その次の年に放牧をするというように、三年に二回土地を耕せるようになって生産が上がった。また、エジプトあたりから優秀な、収穫率の多い小麦が入ってきた。また、もう一つは馬を使うことによって深く耕せるようになりました。

余談になりますが、これは私たちにはわからないことです。日本は騎馬民族だという人がありますが、騎馬民族なら騎馬文化を持っていますはずです。日本では、馬は確かに持ってきていますが、騎馬民族文化というのは全然入ってきていない。馬の使い方を知らなかった。第一にあの蹄鉄です。これは古代ローマ時代に発見されていますが、物を運ばせるためには、どうしても必要です。馬がただ運動をする、走り回るくらいなら大したこ

とはないのですが、荷物を運ばせたら蹄は減ります。骨が出ると馬は痛くて暴れますから、どうしても蹄鉄が必要なのです。ヨーロッパの中世の村ですと、村の鍛冶屋さんのいちばん大きな仕事は、馬の蹄鉄作りになってしまいました。それが中国まではきているのですが、日本では明治まで蹄鉄は使わなかった。ワラジをはかせたのです。こんなに馬の使い方を知らないのも驚きます。また馬は、戦闘に使うのにはいいのですが、物を引っ張ることはできなかつた。軽い戦車ぐらいなら引っ張れるのです。首に輪をかけて、それから綱で引っ張らせたのですから、力を入れますと首が締ってしまうのです。ギリシャ・ローマ時代以来ずっとそのままだす。肩甲骨にクビキをつけて引っ張らせたのがいつか、その発明がいつか、正確にはわかりません。ある本を読んでみますと、十三世紀のころ、コーカサスあたりで発見されて、それが急速に普及したというのですから、人間はあまり賢くないのですね。何千年間養つていて、肩にかけるということに気づかないのですから。これにより、初めて馬で重い物が引けるようになりました。馬車が發展します。船も馬で引きます。そして土地を深く耕すことができます。これは一つの革命なのです。

日本は、ついに馬で物を引かすことができました。重い物は人間が引きました。船だつて、大八車もみんな人間が引っ張りました。進歩派の方は、人件費が安かつたからといいますが、そんなことはないのです。馬に引っ張らせると首が締ってしまったて引けな

いのです。確かに中国までは入って来ているのですが、日本はついにそれを受け入れず、いかに馬文化がなかったかということでありまして、あれは飾りだったという感じです。戦争にちよつと使ったというだけです。それも乗り換え乗り換えしていますから。あんな重い鎧を着て乗ったら、一ぺんで蹄が駄目になってしまつて使えないのです。

そういうことで、ヨーロッパに農業革命が起こつた。その農業革命を遂行したのは、単婚独立自営農民です。夫婦が結婚して、小さな土地を、借地であれ自分の土地であれ、何でもいいのですが、自分の責任において耕し、年貢その他を納めたあとは自由に処分できるといふ、独立自営単婚小農民。これが成立し、第一次農業革命が行われたということでもあります。

念のために申し上げておきますと、世界の中で自生的に農業が発展してきました、だんだん小さくなつて、単婚独立自営小農民層が一般的になるところまで発展したのは、ヨーロッパ以外には、日本だけであります。つまり、いままでは半分は結婚もできない奴隷が耕して、その上に大百姓が立っていたのですが、二人で一生懸命にやつて田を広げ、収穫を増やすことをやった。そこまでいったのが農業のいちばん進歩した形態です。いつ日本で単婚経営になったか。早い人は南北朝時代にできたと言いますし、遅い人はもっと後だと言うのですが、これは日本だけではありません。

もう一つ申し上げますと、ここで初めて一夫一婦制が貫徹いたします。つまり処女と童貞とが結婚して子供を産んで、立派に育て上げて一生添い遂げて次に譲るということを理想とする一夫一婦制は、この農業と関係します。ギリシャ・ローマも、その時点では一夫一婦制ですが、お互いに何度も結婚していますし、結婚できているのはそう多くはありませんので、一婦制ではないでしょう。いわばフリー・セックスであります。この制度は日本だけなのです。人類の歴史の中で、二人が一生添い遂げて子供を育てるという一夫一婦制が成立したのは、日本とヨーロッパだけですし、それは単婚自営農民のために生まれた制度です。今日のそれはその余勢でありまして、もういづれ崩壊すると思います。皆さん、もうサラリーマンの方は奥さんはいらないでしょう。男も、女にしてもそうです。お惣菜まで作ってくれる商売がありますから、フリー・セックスで、結婚制度はないという方向にどうしても向いていくと思います。離婚が増えてきていますし、五百年の歴史というだけで、日本とヨーロッパだけの話ですから。

問題は、そのときの女性の結婚適齢期であります。男性のほうは、職業によっていろいろ違いますが、女性のほうは、東西ともに全部一致しております、大体数え年の十七、十八歳であります。メンスが出て、受胎可能になったときに結婚するのだらうと思います。ヨーロッパでは、結婚と教育と病気は、教会の仕事です。神様が仲人なわけです。神が仲

人ですから、神の選択に間違いなしというわけで、離婚は許されません。いまでもカソリックでは離婚は許されませんでしよう。

日本の媒酌人というのは不思議であります。私はある外国人に結婚式場を見せたのです。あの難しい字で媒酌人と書いてあるでしょう。「これ何だ」と言われまして、「仲介する人だ」と言いましたら「不思議だな、それは神様の仕事じゃないか、日本の神様は何をしているんだ」と聞かれまして弱りました。「あれは公証人だ」と言っておいたのですが、カソリックでは離婚は許されないので。随分死にもしますが、大体離婚はしないのです。問題は子供が生まれるということです。中絶などということはしませんし、避妊法などというもの、オギノ式などは知りませんから、随分生まれると思います、確かに死ぬまでに十二〜三人は平均して生まれています。皆さんもルーヴルとか、ブリティッシュ・ミュージアムに行かれたらおわかりいただけだと思いますが、あの十四〜五世紀ぐらいの絵を見られたらおわかりいただけだと思います。貴族とか王様の太った夫婦が二人で座っている。その後ろに、まるで幼稚園ではないかと思うぐらい子供がブラブラいますが、あれは幼稚園ではなくて、みんな自分の子供なのです。それは貴族ですから育てられるのですが、十四〜五人は生まれます。ほとんどの女性が十五〜六で結婚して、また子供を生むということになると、人口は爆発するわけであります。

中国では戦前、私もが三高生のころは四億人でした。「四億の民あり」と聞いていましたが、アツという間に十二億になってしまいました。これを三分の一に減らさない限り駄目だと思います。どうしたらいいのか、大変な難題です。中国の適正人口は二億ぐらいいだそうです。どうするか知りませんが、大変だと思います。インドは三億だといところが、七億人になっている。

十二世紀当時のフランスの人口は一千万人、ほぼ今日の国土と一緒にです。イングランドは人口八百万人だそうです。これが倍になるのに二百数十年を要します。大人になるのは三〜四人で、育っていないのです。確かに三つ四つぐらいまではたくさんいますが、大人になるのは、その中の三分の一です。それはなぜか。流行病その他、いろいろな原因があります。しかし、大きな理由は、親の選択であります。

やっと親子が食糧を奪い合わなくなり、殺し合いをしなくなります。すさまじい地獄絵を現出しないような世の中になり、これによってルネッサンスが生まれ、ヒューマニズムが生まれてきたのですが、十何人もいる子供を大人にするということはできません。一家が飢えてしまいます。再生産をするためには、どうしても生まれた子供を選択しなければなりません。ヨーロッパは、はっきりと選択であります。大体二つか三つに分けます。どうあっても、育てる子供は三〜四人。この子は賢いとか、この子は気立てがいいとか、こ

の子はきれいになりそうだとか、そういう自己の判断によって子供を選びます。次は、余裕があったら育てる子供、これは少しはいるでしょう。あとは放置であります。捨子です。食事を与えないわけです。食卓権が与えられません。

念のために申し上げますが、フランスでは確か十九世紀まで、奥さんには食卓権はなかったはず。家族と一緒に席に座って食事をしてはいけなかったのです。みんなの給仕をして、後で上前をはねるのですから別段心配はいらないのですが、十九世紀というのは、そういう時期でした。

親から見離され、食事を与えられない子供の運命は悲惨であります。この子供たちは女中代わりに台所で真つ黒になって働く。ボロ布を着て働く。そして盗み食いをするか、残飯をあさる。もう一つ、十四〜五世紀までは、村でも町でもちよとした家ではガーデンというものを持つていました。庭ではなくて、野菜畑です。リングなどが植えてある果樹園でもありますし、豚なども養っています。そこで家畜の世話などをして、その上前をはねる。またとり残しのリングなどをかじる。そういうことで露命をつないでいたわけです。ヨーロッパでは家畜と同居の世界なのです。馬、牛、羊、豚、冬などはみんな一緒です。中世の絵などを見ますと、これはひどいものです。十五畳か十六畳の掘建小屋に、馬、牛、豚、羊が一緒くたです。そしてそこに火が燃えていて、鍋がかかっている。ベッドがその

そばにある。牛も小便をしますし、といった世界です。恐るべき流行病が襲ってまいります。ペストは有名ですが、いちばん恐しいのは赤痢だったのではないのでしょうか。それもアメリカ赤痢でしょう。疫痢、チフス、コレラ、マラリヤ、湿地帯のせいかマラリヤが多かったようです、それから猩紅熱など、法定伝染病が一斉に襲いかかってくる。汚い物を食ったり、家畜の上前をはねたりしなければならぬ連中、つまり子供たちが最大の犠牲者なのです。バタバタ倒れていきます。

クルモンという学者は、チラツとこういうことを書いています、「十二世紀のフランスの北方の裕福な農業地帯においても、平均四人に一人はハングリーにより餓死した」と。その主たる犠牲者は、親から見放された、とんでもない物を食っている栄養失調の子供たちだったと思います。普通の年で四分の一ですから、一千万人では二百五十万人ずつ死んでいるわけです。栄養失調死といつていいのか、餓死といつていいのか、流行病死といつていいのかわかりませんが、とにかくひどい死に方をしている。こんなことがあつてはたまらないというので、必死になつて働いて豊かな近代社会を作り上げた。そのときそのヨーロッパに日本が出会いました。そして、ヨーロッパはもともとからこうだと思つたのですが、実はそうではなかったわけであります。

そうしますと、仮に一千万人のうちの二百五十万人が毎年すさまじい形で死んでいくの

が普通だという世界にいたフランス人が、日本のように三千万人がいて、五十万人が死んで何が大騒ぎだ、というのもわかるような気がいたします。こちらとしては、五十万人が死んだのに「何だ、もつと死んだのかと思った」と言われて「この野郎」という気になります。そのギャップは面白かったですね。栄養失調病というか、流行病というか、餓死というか、それは難しいのですが、そういう悲惨な死を遂げた世界、これがヨーロッパにあります。

問題は、「選ぶ」ということです。これは生死を分けた選択であり、生かす、殺すの選択であります。これは日本人にはできないのではないのでしょうか。武田泰淳は「私たちは『ノアの方舟』はできない」といいました。大水がきて、方舟に乗る者を選択して後の者は捨てよと言われてもできない。日本のお母さんは、子供が十人いて、この中の三人を選び、後は捨てよと言われたら、「もう駄目、お母さんと一緒に死にましょう」ということになると思います。選択の民族と、情死の民族とでもいいでしょうか、それができない民族との違いです。ヨーロッパの選択はそういう意味であります。日本では、選択をしてはいけないわけで、平等・助け合いとよくいいいますが、これはちょっと不思議だということです。

日本では選択の概念がわからないといいますが、これはグリム童話で考えてみるとわか

と思います。『イソップ物語』というのがあります。これはご承知のとおり、ギリシャの奴隷のアイソーポスが書いたと言われている寓話集であります。これがずっとヨーロッパ中に広がって、学校その他がないときは、国民の人生訓、あるいは社会訓として、国民が随分勉強してきたのです。逆にいいますと、『イソップ物語』によつてヨーロッパの社会状況の根本がわかるのです。

その中で、ギリギリスが冬にアリの所へ食物をもらいにくるところがあります。ギリギリスは「飢えて死にそうだ、アリのさんのところには、たくさん食べ物があると聞きました。がちよつと私に分けてください」と頼む。アリは意地悪く「私は、この冬を越すために、夏の暑い時期に必死になつて働いて、やっと冬を越す食べ物を貯めたのですが、あなたはそのとき何をしておりましたか」と聞く。ギリギリスは「はい、皆さんのために（これは言いわけでしょう）歌を歌つておりました」と言うのです。

この『イソップ物語』は、大麥早くから日本に入つておりました。戦国時代に宣教師たちによつてもたらされております。当時の日本人は不思議であります。面白いのは、そのときに入りました『聖書』や宗教上の伝説『トマス・ア・ケンピス』『イミタチオ・クリステイー』なども日本で印刷されました。宣教師たちがそのころには印刷の機械・活字を持ち込んで、日本の職人を頼んで、実に見事な印刷物にしています。これは、いま天理大

学の図書館に、重要文化財として残っていますが、見事な印刷です。翻訳も随分できました。『イソップ物語』も翻訳され、『伊曾保物語』として、江戸時代に何度も版を重ねてあります。いちばん新しいものが岩波文庫に入っておりますが、これは、随分換骨奪胎された見事な翻案であります。

しかし、これは日本の物語とごっちゃになっております。たとえば毛利元就が死ぬ前に子供たち三人をそばに呼んで、一本ずつ矢を与えて「折ってみろ」と言った。それは折れたが、三本まとめて折らせたなら折れない。そこで元就は「この辺りには豪族が取り巻いて、俺が死んだらみんなで襲いかかってくる。そのとき兄弟は決してバラバラになるのではない。一人では簡単にやられてしまうが、三本の矢ともなれば簡単には折れない。お前たちは力を尽くして毛利を守れ。争ってはならない」と言った、という有名な教訓があります。そのとおりにして毛利は生き残ったわけです。しかし実はこれは『イソップ物語』なのです。そういうものまで入っているのです。『日本の伝説』か『イソップ物語』かわからないくらい、日本人の中に入り込んでいます。見事に翻案しているわけです。問題は、このときアリがギリギリスを「だから駄目じゃないか」と叱った後、「アリはギリギリスに若干の食べ物を与えて帰らせた」と書いていることです。食べ物を少しやっているのです。「食べ物を少しやった」という風に、いちばんの変更を加えたのはルソー

らしいのです。あれは随分ヨーロッパが穏やかになって、食糧が豊かになってからの訳で、それがいちばん流布しているとの説もあります。ですがこれは、日本の改竄だと私は思います。

もつとひどいのもあります。戦後の話です。「もはや戦後ではない」ということになって、いろいろなところから少年少女文学全集が出ました。そのとき私は子供のためには、三十数冊の全集を買いました。その中の『イソップ物語』をバラバラ見ていましたら、有名な女流評論家が編纂された『イソップ物語』が載っておりまして。そこでは、アリはキリギリスをたしなめたあと、「温かく迎えてやり、仲良く一緒に暮らしましたとき、」となっている。これは驚きました。キリギリスが冬を越すなどというのはあまり聞いたことがない。これは日本の戦後のヒューマニズムです。結構だと思えますが、ここまで改竄されるかどうか。いまの若い人はこれで育ってきているわけです。アリはキリギリスを温かく住ませたという、フワツとふやけた訳のわからないことになっています。私はギリシャの原典はどうも知りませんが、もともとキリギリスではなくて、セミだったようです。セミは早く死ぬと言いますが、ギリシャにはセミはいませんので、いつの間にかヨーロッパのなかで、キリギリスになったのでしょう。もともとの意味をご存じでしょうか。アリはもちろん一粒の小麦も食物もキリギリスにやっていません。そして、言うことは「踊って

おられたのですか。それでは、今度も踊られたらどうですか」。これがアリの答えです。これは残酷な答えです。踊るということは、要するに断末魔の踊りですから。これがヨーロッパの源泉です。

日本では、戦国時代でさえもそうしない。そんな無茶は気の毒だというわけです。若干の食べ物を与えており、戦後になると、大甘で、温かく迎えて一緒に暮らしましたとき、という見事な嘘をデッチ上げ、私たちはこれがヨーロッパ・ヒューマニズムだと思っているのではないのでしょうか。元は「踊ったらどうですか」です。はつきり申しますと、現在のヨーロッパ人の選択の中に、日本は入っておりません。日本とソ連さえなければ、われわれは幸せだったと言っているのですが、そのとうりだと思えます。日本がこんなよいけないものを安く売らなければ、ヨーロッパはもつと悪くて高いものを売りつけて呑気に暮らしていられたのに、こんな奴が来たから……と排斥しているわけでしょう。キリギリスとアリとは仲良く一緒に暮らしましたとき、ということ、話し合ったらわかるとか、援助したらよろしいとか、そうしたらうまくいくだろうと考えているのは、とんでもない甘さだと思います。いまの日本に金があります、政治力はありません。しかし、これだけははつきり見すえていただきたいと思えます。

このことは、たとえばヨーロッパでも親の選択でありまして、親は自分の判断で子供を

選ぶ。間違えたらどうなるか。これを証明しているのがリヤ王であります。シェークスピアという超文豪は、各地からいろいろな伝説を持って来て、それを基に見事な文学作品を仕上げた人です。「リヤ王」伝説というのは、中世のヨーロッパ一帯にいつばい残っています。要するにリヤ王は最も立派なコーデリアという娘をきらい、これを放り出した。選択から外したわけです。父親から放り出されたコーデリアは王様の子ですから、飢え死にしません、泣く泣く城を出て、フランスに渡り、そこで貧しいけれども、心やさしい貴族の青年と結ばれて、とにかく静かな生活を送ることができた。

一方、リヤ王が選んだ子供はすさまじく強欲な連中で、親が死ぬまで待つていられない。相続したさに、リヤ王を外へ放り出してしまふ。自分が選んだ子供から放り出されたリヤ王は、憤怒のあまり狂乱して、荒野でのたれ死にする。お父さんが放り出されたと聞いた親孝行なコーデリアは夫とともに小さな軍隊を組織して、イングランドに渡ってお父さんを救い出そうとするのですが、こんな小さな軍隊はどうにもならない。きょうだいたちにつかまって、戦争に負けて、コーデリア夫妻は斬殺されてしまふ、そのリヤ王の侍従長も全く同じことです。一家が全滅してしまふ。これは、親が選択を間違えたらこういうことになるのだ、その責任は全部お前のところにかかってくる、という反面の教えであります。これがヨーロッパだと考えます。

有名なシンデレラもそうです。「シンデレラ物語」は十八世紀のフランス文学があい
うきれいな少女小説にしたものです。このシンデレラ伝説ほど、ヨーロッパの中世紀にた
くさんあるものではありません。あれは親から見放された子供です。真つ黒になって女中さ
んになって働いて、そこへ王子様が町にやって来て、パーティが開かれた。姉さんとい
うのはブラザーズかシスターズかどちらかわからないのですが、とにかく選ばれたきようだ
いはいいそいと晴れ着を着てパーティに出かける。シンデレラは着る着物もない。寂しく
竈の横にうずくまっています。そこへ魔法使いのお婆さんが現れて、魔法の杖を一振りして、
シンデレラの着ているボロ着を絹のきれいな着物に、木の靴を銀の靴に、カボチャを馬車
に、ハツカネズミを馬に、ベッドまでつけて送り出してくれた。そのとき、お婆さんは
「この魔法は十二時までですよ、済んだら、それまでに帰っていらっしゃいね」というこ
とを言いつける。シンデレラは出かける。王子様は突如として現れた美しい女性に夢中
になって、シンデレラとばかりダンスをしたりして楽しんでる。シンデレラも楽しくて、
お婆さんとの約束の時間を忘れていた。そうしたら、教会の鐘が十二時を告げ出した。シ
ンデレラは思い出して、王子様を突き飛ばして階段を駆け降りる。教会の鐘が鳴り終わ
るとともに、魔法がとけて、シンデレラの着物は一変してボロ着になる。馬車はカボチャに
なり、ハツカネズミはどこかに行ってしまう。シンデレラはびっくりして、ほうほうの体

で家に逃げ帰って、また竈の横にうずくまった。しかし、シンデレラはそのとき会場に銀の靴の片方を脱ぎ落として来た。王子様は突如として消えてしまった美しい娘のことが忘れられない。そこで従者にその銀の片方の靴を持たせて、この靴の合う乙女を町中探させた。私は子供のときに読んで、おかしいな、魔法がとけてすべてが元に戻るのに、どうして銀の靴が戻らなかったのかと聞いて、先生が閉口されていたことを覚えています。そこが御伽噺です。みんな合わせて履こうとするが履けない。使者がシンデレラの家に行ってきた。シンデレラの姉さんたちは争って履こうとする。しかし、小さすぎではけない。シンデレラはやっぱり栄養失調だったから、足が小さいのでしょうか。どうも足の大きいのは不器量だということは、古今東西一緒だったようで、姉さんは履けない。シンデレラは見れば自分の靴ですから、履こうとします。そこはヨーロッパ人は自己主張が強いのです。きょうだいぐです。シンデレラは履く。さては、ということになって、成功したという話です。これが親から見捨てられた子供たちの夢でしょう。

誰か星の王子様か、魔法使いのお婆様でも現れて、選ばれたきょうだいたちと同じように、きれいな着物、温かい食事、寒さ防ぎの部屋、そういったものを恵んでくれないかしらという意味を持っている。現実には、そうはいかない。そこでベストやコレラが襲ってく

る。栄養失調で倒れて死んでいく。そのなかでの夢を物語ったものだったのです。

そのヨーロッパに対して、日本はどうしたかというところ、やっぱりうば捨て山というのは信州とかそこの伝説でして、実際にはありません。日本ほどお婆ちゃんとかお爺ちゃんが威張っている所はない。だから、おかげさまで、三高同窓生も威張っていられるのですが、これは珍しいです。ドイツなどに行きますと、いまでも若い者が隊を作って歌を歌って歩いています。「誰がためにこの高い税金を、誰がためにこの中の税金を、あいつらのためだ、あそこにいるあいつらのためだ」と歌っています。お爺ちゃんも座っていて、俺はもつと長生きして、あいつらからもつと巻き上げてやるんだとにらみ合っている、そういう世界です。あの歌を持って来て、日本で流行らせてみたらどうなるかと思いますが……。対決です。日本はそうではない。

しかし、日本でもあることはあるのです。大体人口がピタッと増加が止まったのは享保年間ですが、どの村でも、男の子一人、女の子一人の家になりました。間引きです。ヨーロッパ人は、妊娠したときに人間の魂が付くと考えていますから、中絶は人殺しだという観念があります。日本はヨーロッパと違いまして、生まれてオギャッと産声をあげたときに、本当に生命の火がつくと思っている。死産した子は、本当の生命を持たずに死んだことになるようです。ですから、中絶はせず殺します。これは産声を立てないように殺しま

す。生まれた子を産婆さんかお母さんが水桶の中に突っ込む。そうでなければ、濡れ手拭いを口に当てて殺しました。おそらく三、四人は殺したでしょう。ですから、いまある地藏菩薩の像、地藏様というのは、地獄に出現される唯一の仏様で、同時にこれは子供たちの守り神です。三途の川で夭死した子、病死した子、親から殺された子が泣いている、苦しんでいる。地藏和讃というのがありますが、これは地藏様の徳をたたえた歌です。歌はいろいろありますが、「峰の嵐を聞くときは、父が横とはせ上り、川のせせらぎ聞くときは母が横とはせ下り、」というような歌がありました。親を求めて嘆き苦しむ。地下には親は現れない。地獄の鬼が花を奪い去り、鉄棒で叩きつける。子供たちは悲鳴をあげて逃げ惑う。そこへ地藏様が三途の川に出現して、錫杖で鬼たちを追い払う。子供たちはその地藏様の仏の下で、涙の跡、血の跡を残したまま、やっと安らかに寝入るという、そういう歌が地藏和讃でありまして、これはいろいろあります。三途の川を地上に現出したというのが、青森県の恐山です。そこへ行きますと、バス・ガイドの車掌さんがその歌を歌ってくれます。地藏様はそういう夭死したり病死した子供たちの守り神なのですが、私の死んだ友人でそれを研究した連中によりますと、この地藏様の像は一億体あり、いま残っているのは四、〇〇〇万體ぐらいあるだろう、と。ことごとく享保年間の以後の産です。それは専門の石工が作ったものではなく、稚拙な人が、親か誰かが作った像です。地藏様は、

いわゆる水子、殺した子の墓です。夭死した子の墓となります。親が殺したので、たまったものではない。だから、農村はそのころ流罪を伴わないように、自分で小さな墓の地蔵様を作つて墓にし、あるいは路傍に置き、その地蔵様にいろいろなやだれ掛けを備えたりいろいろして、どうぞ私の子供の魂を守ってくれと願つた。そういう意味で作つたのが、一億近くあるのです。夭死とか病死を除いて、ほぼ享保年間に、平均して農家が三、四人から五、六人子供を間引いていたということになれば、この数字がピッタリ合うそうです。日本もせつぱつまつていたころ、親はたまらず、殺したくて殺すのではないけれども、先祖代々の田を守つていくために殺さなければいけない。これははつきり申しますと、成人天下です。選択なしに、人数主義です。いま二人いるから、もう一人男が出たら、予備のために一人おいておく。また女の子だと、これを殺そうとなつたのではないか。見事なほど農村では二人です。十四、五歳で結婚して、男と女の子二人。そんなにうまくいくものですか。これは間引いたのです。一億近く殺してきました。しかし、責任はなしなのです。責任があるのは先祖なのです。先祖代々の家を守るためです。それから選択をしません。当てずつぽうです。日本はやつぱり選択の責任を負いたくない。泣き泣き殺していった。だからこそ、農村にいまでも残るいろいろな歌には、哀切極まる響きがあります。その子供を殺してきた親たちの悲しみがあるのだらう。貧乏のせいだけではないと思います。

そこが違いでありまして、日本人は選択できない。しかし、近代社会に入って、ヨーロッパはいままでは何とかやってきたけれども、世の中がこれから先非常に厳しくなってきた、だんだん裸というか、きれいな事をかなぐり捨てざるを得なくなってきた。このすさまじいものに接していくときには、私たちははつきりと違うということを認めなければならぬと思います。甘いことではやっていけない。殺してしまえというわけではないのです。しかしわれわれは、うっかりすれば、また間引きにいかざるを得ないのではないかと。もう少し考え直す必要があるのではないかと思います。その点から見ると、キリスト教と仏教の違いも、私はフツとわかるような気がします。イエス・キリストとかお釈迦様という巨大なる人の介在を抜きにして、その背景だけをちよつと考えてみたいと思います。

ヨーロッパのキリスト教の源泉はもちろんユダヤ教でしょう。乱暴な言い方でいえば、ユダヤ教というのは、唯一絶対神であるヤーベの神との契約を結んで、ユダヤ人が非常に敬虔なる生活を送っていたければ、やがてヤーベの神はもう一度このユダヤ人のために、ソロモンの栄光、世界帝国まではいきませんが、幸せになる王国を与えてくださるといふのが、いわば原則でありましょう。だから、イスラエルの民はいまでもそれを必死になつて追求しております。古代ユダヤ帝国の栄光をもう一度、イスラエルの地において再現するのだということに絶対にありますから、それまで一切の妥協はしたくないということを言いま

す。それはそのとおりです。しかし、ユダヤ人がそういう生活をしているときに、ローマ帝国が成長してきまして、ユダヤ人の国はローマ帝国の植民地になりました。ローマ帝国は立派な国です。一言で言えば、ローマ帝国の世界の支配原則は、俺のものは俺のもの、お前のものは俺のもの、汝ら、全員飢えて死ね、俺はそれによつて栄える、という実にはつきりとした原則であります。政治的には多少自由を与えます。植民地の一切のことはこれをせず、自分の必要なだけを取り上げます。これがローマ帝国の支配の原則でありまして、その跡を継いでいるのが、スペインなどの原則でありましょう。

だから、大抵ローマ帝国の支配下に入りますと、エジプトなどを除いた人口は二、三十年のうちに、十分の一に減っていきます。すさまじい支配です。ローマ帝国は、取るものがなくなると、また次の所を取る。そこが駄目なら、また次のとなる。ローマ帝国は、その当時の技術と人口を吸収し際限なく膨張していつて、これ以上駄目だとなった途端に、風船玉がしぼむように崩壊する。

ユダヤ人がその下に入りましたら、もう夢がもてなくなったのではないか。やがて俺たちもここで終わるといふ絶望的な状況になった。これがキリスト教の生まれた社会的な基盤だったと思います。もう現世の先に、われわれの栄光は信じられない。それならヤーベや神様、いや、現世ではなくて来世だ、ということになるのです。「はい、私は食糧をあ

あなたに差し上げます。私の生命を取るなり、私の肉を食べるなりして、あなたは行ってください。その代わり、私は神に殉じた者として、天国における永遠を得ます」と。未来社会の幻想ではなくて、あの世とせざるを得なかった、それがキリスト教だと思っています。

ヨーロッパ世界にキリスト教が育っていったわけですから、愛の主張は自己犠牲の主張のはずです。アリはギリギリに食事を与えませんが、与えられないのです。与えたら、アリは食糧不足で死にます。いまでもやっぱり犠牲ということを非常にやかましく言います。塩野七生さんはルネサンスの研究者で、私などよりはるかに詳しい人ですが、この人がときどき書いています。「中東の世界に日本が介入するのもいいけれども、頼むから、お金は出します、ただけは言わないでくれ」と。「汝、金をもって人の血をあがなわんとするや」——自分もやっているくせに、ヨーロッパ人はこれには怒ります。イタリアではレバノンで二人の二等兵が死にましたが、国葬です。ユダヤ人は喜んだ。爆弾で死んだのではないですから、勇ましく死んだのではないのですが、血の犠牲者が出たので、イタリアは初めて国際社会で対等の発言ができると言います。しかし、これはわれわれにはわかりません。

仏教は違うと思います、仏教の根源は何と言っても、お釈迦様でしょうが、釈迦族の国の隣に、ある途方もない巨大な勢力ができて、自分たちの国民が隷属するのを予感されて、

その豊かな人々となるべき人のために説教されたのがお釈迦様だということになっていきます。だから、釈迦のその人たちへの説教は「汝ら、余ったものはことごとくこれを施せ、そうすれば、みんなが仲良くなる」。慈善であります。清貧に生きよ、なのですから、与えても死ぬ必要がない。お釈迦様は豊かな国の道徳を説かれたのです。

仏教というのはそういうものが根本ですから、シルクロードを通り、或いは南のほうからセイロンを経て中国に渡りまして、いろいろな歴史的条件の下、結局通過点ではことごとく消滅して、いま仏教が残っているのは豊かな米作地帯だけでしょう。施しても死ななくて済む、そういう余裕のある世界だけに育っている。だから、近代に合うのではないかと思います。キリスト教とはそういう違いがある。

だから、ヨーロッパの世界は選択だと。そのうえにすべてが成り立っている。たとえば学校制度というものを考えてみますと、選択です。日本では昔はそれをそのまま受け入れ、小学校で落第がありました、いまはありません。ちなみに学校の先生は詐欺師だと思いません。中学校も高校も、卒業証書で「課程を終えたことを証明する」などと書いてありますが、あれはインチキだと思います。「先生は決して合格したと書いておらず、『三年の課程を終えたことを証明する』と書いているだけだからあれは嘘ではない」と、小学校の先生に叱られましたけれども。

日本では生徒を落とせないでしょう。フランスはどんどん落としていきます。留年しても平気なのです。ちよつと俺は奥手だから、と遅れるのですが、十五歳までに終えなかったら、小学校の権利剥奪ですから、すごいものです。だから、学年が上がるにつれて、どんどん減っていくのです。上の学校へ行く者は減つていつて、トップにエナとかポリテクニクといった超エリート校を作る。日本ではそれはできないのです。

日本の選択はせいぜい、この男を出世させるかさせないか。落第してもう一年待たせるかとか、その程度の選択ではないでしょうか。これはヨーロッパの選択とは違うわけです。そういうことをもつと考え直していかないといけません。私たちは、近代十九世紀に理想化されたヨーロッパを真面目に、無邪気に信じ、その道徳を自分のものにしようとした。

それは立派なことで、否定いたしません。ただし、その奥底にあるすさまじいものを見ることができなかつた。いま見せられようとしている。大丈夫かなというところがあります。

もう一つだけ、ちよつとエピソードを申し上げてみたいと思います。日本の歴史家は真面目な正史は読みますが、くだらないものは読まないで困るのです。私はくだらないものが好きですから、ボチボチ読む。くだらないものは難しくて変な言葉がありますから、全然わからないのですが、そこで発見がありました。バイエルン地方の十三世紀のいろいろな習俗を書いたつまらない本を読んではいましたら、面白いものが出てきた。絵入りの本

でありまして、男と女の人が決闘しているのです。その説明には、「これは離婚の訴訟だ」と書いてあるのです。ヨーロッパは先ほど申し上げたように、夫婦は神によって見合わされたものですから、離婚は許されない。しかし、世の中というものは、神様がやつても、やつぱり別れたくなるものでありまして、この点はお釈迦様のほうが、もっと苦勞人だと思えます。お釈迦様はちゃんと、「愛し合う同士が一緒になるのも苦痛であるが、いやな同士が別れないのは、それにまさる苦痛である」ということを書いています。

この絵は、どうにもうまくいかない場合の便法であつたようです。ことに亭主が無茶苦茶ですから、どうにも我慢のできない奥さんは、自分の結婚式をやつてくれた教会に願ひ出る。そして、あの結婚式は無効だということを訴えるわけです。そのときにどういうふうに訴えるかと言いますと、自分と一緒にいる男は、一緒になつてみたら全然働かないで、朝から晩まで遊び、飲み食いしている。働きもしない。何かというと、殴つたり蹴つたりする。博打はやる。泥棒はする。この地上に存在すべきではない人間だということを言うのです。それに引き換え、私は貞淑にして夫に尽くし、真面目に働く。申し分ない女である。こんな人非人と私のような立派な女性を、神様がよき夫婦と認定されるはずがない。よつて、この結婚は無効であつたと言うのです。そうすると、教会はそれに立ち会ひまして、「そうか。それならば、夫が人非人であるという証拠を見せよ」と言つて、決闘にな

ります。決闘しまして、首尾よく奥さんのほうが亭主を殴り殺しますと、「神、この女性をよみしたまえ」と言うわけです。これは無効になるわけです。負けますと、ひどくなるのです。

ヨーロッパのほうはこうした事例が圧倒的に多いのです。教会裁判はあまり人を殺しません、原告と被告を一緒に煮え湯の中に腕を突っ込ませる。ヤケドをしたほうが負けだとか、火の中をくぐらせる、焼けた鉄板の上を歩かせる、ヤケドをしたほうが負けということです。いちばん普通に行われているのは、訴えたほうと訴えられたほうの両手を縛りまして、川の中に放り込む。溺れ死んだほうが悪いということになるのです。これは十六世紀まであります。この絵の場合は決闘で、その場面が書いてあり面白いものです。

ヨーロッパはいやに合理主義なのです。男のほうの武器は剣でありまして、いまの細いフェンシングの剣もあれば、アラビアの剣もあります。そのころですから、殴られたほうが痛いような重いような、ゲルマンの剣です。女性のほうの武器は皮紐に鉄の玉をつなぎまして、これを振り回す。そんなことをすれば、男のほうが有利に決まっていますから、そこにちゃんとゴルフと一緒にハンディがついている。男性は右手を背中に縛り、剣を持てるのは片手なのです。それでもまだ男のほうが有利だというわけです。決闘場に丸い平たい穴を掘りまして、真ん中に杭を打って、男の片足を紐で縛りつけまして闘わせるので

す。そうなると平等だというわけです。これは男女間の決闘の風俗にならう、と書いてあります。それで、首尾よく夫を殺したらいいのですが、殺し損った場合はどうするか。いちばん面白いケースは、元奥さんのほうがガンと一撃やる。男は剣をバツタリと落としてそこへ倒れ込む。得たりか然りで奥さんは悪鬼のような形相で、ハンマーみたいなものを振り回す。男はもう一撃で殺されとなると、必死になって蒼白になって謝って、「許しておくれ、生命だけは助けておくれ、そしたら、私はよく働く。お前を殴ったり蹴ったりしない。許しておくれ」と哀願する。そのときに、奥さんだつて涙を流して真つ青に血を流して謝っていると、つい気の毒になつて生命を助けるとか、中には「私も悪かった」と言つて涙ながらに彼を引き起こしたりすることがある。この場合の判決はどう出るかご存じですか。

日本の裁判所だったら、「おお、よしよし、夫婦というのは憎み合つても、実はそういう愛情が残っているのだから、別れるとか喧嘩して殺すなどと言わないで、家に帰つて仲良く暮らしなさい。さようなら」ということになるのですが、この場合の判決は、死刑です。教会裁判で死刑があるはずはなく、実際に行われたかどうかは知りませんが、そう書いてあるのです。なぜか。「お前は神の前の証言で、この男は地上に存在すべきではない人間と誓つたではないか。許すのか。存在させるのか。お前はこの男に対して、どんなに

頑張っても、寸分の愛情もない、と誓ったではないか。いま涙をもって抱き起こしている、愛情があつたのか。神を偽った。神を偽る者として死刑です」。これは無茶です。だから、いったん宣言して決闘場に残った人は、そこでどう後悔しようと、殴り殺されなければならぬわけです。これは本当にあつたのか、そういうことが書いてあつただけかはわかりませんが、言論の責任の追求です。言つたことは変えることができない。必ず実行しなければならぬ、これが根底にあります。

ですから、中曽根氏など日本の偉い人がアラブなどに行つて、こうしましょう、こうしましょうと、いろいろな皆さんの約束しますが、帰つてみるとそううまくはいかないでしょう。自民党が反対したり、野党が反対したり……。会社でも、部下が「一生懸命やるつもりでいたけれども、いろいろ事情がありまして、できません」と言う。こうした場合、向こうは人非人扱いです。殺せということになるのです。その点では、私も助かつています。いい加減なことばかり言えるので、日本の評論家は楽だと思います。

どうもヨーロッパと日本と世界を見直すためには、こまごましたことも大事ですが、根本的に随分違う、その違いはとけ合えないものでもあるということを考えなくてはならないのではないか。つまり、話し合つたり、一緒に暮らしたら理解できるというのは、結婚の問題、夫婦の問題にはあてはまりますが、問題は国民同士の場合です。お前と俺とは終

生どうすることもできない相手だな、ということを理解することも必要なのです。ただし、すぐ殺し合いをするのではなく、何とか妥協の道を探る。そういう理解が必要で、理解し合うということは、すぐ抱き合うということではない。敵だということを理解し合うということは必要だと思います。そういう意味で、これから先、日本はいろいろな点において、もつともつと相手の本質を見すえなければならぬ。甘さだけで、助けてあげたら喜んでくれるだろうと考えているようですが、助けてあげて喜ぶ人はいりません。もつと厳しい形で対処していくことがいま求められているのではないか、

一言だけ最後に申し上げます。戦争中、私たちはビルマで、いわば無期限重労、永久重労宣言を受けましたが、ちょっと紛わして先に帰してもらった。生き残った戦友の家を訪ねましたところ、「お母さん、帰って来ました、帰って来ました」と、みんな喜んでくれたのですが、中にあまりうれしそうな顔をしていない人がかなりおりました。お母さんにとつては、帰って来てもらったら困るのです。「弟がちゃんと跡取りしていたのに、また帰って来た。田を分けなければならぬ。難儀だ」と言う人がありましたし、もう一人はある料理屋に行きまして、「お宅の息子さんが帰って来ます」と言ったら、お母さんは「あらまあ、またあの子が帰って来ますの」と泣き出した。「あれのおかげで私たちはしんどい目に遭いました。やっと戦争へ行行って死んでくれると思っていましたのに、また帰るんで

すか」と、あまり帰って来るのを喜んでもらえない人が、かなりいました。兵隊も知っていました、「俺たちはここで捕虜になっっているけれども、俺の家に帰って、俺の座る席はあるのかな。いろいろのどこに座った方がいいのかわからない」と不安を持っていました。貧乏な悲しい農民です。そういう世界ですから、「帰ってくれた。うれしや」と、心からみんな温かく迎えたのではなく、いろいろ複雑な思いもあつたのです。戦争から帰って来てわかつたことです。

汚ないものとするのではなく、人生の本質を見る。殊に、ヨーロッパの世界を見る場合、私たちは憧憬の目で、愛の目で、尊敬の目で見よ、と言われました。それも確かなのです。絶対に否定いたしません。しかし、もっともっと冷静になる必要があるのではないかという事です。歴史家であるにもかかわらず、今日は余計な、絶対に資料に出てこないことをお話してみました。どうもご静聴をありがとうございました。

（京都大学名誉教授）